

中小企業の技術力

川並鉄工

川並鉄工(本社)京都府、川並宏造社長)の創業は、2代目だった祖父が家督を相続した1904年としているが、これ以前から金物販売などを営んでいたという。ここから顧客のオーダーメイドに応えるような「街の鍛冶屋」になった。

大正期の終わりから昭和初期にかけては街の鍛冶屋を継続しながら、プランコや滑り台、さらに飛行塔など大型の遊具まで自社で開発・製造を開始した。京都の学校をはじめ、多くの百貨店などに納めた。

現在は、医療機器や産業機械向け部品の加工を手掛ける。加工した部品がどのような最終製品になるか、分からないものも多い(川並社長)とのことだが、最近では「リニア車両の製造機器向けなども出てきた」という。

長い歴史を持ち、創業から67年前。きっかけはとある団体の5周年記念品として、わて、金属を削り出した尾

虫のフィギュアが配られたことから。部品加工技術を集結して作られたものだが、一般の人からしたら、文鎮にしかならないようなものだった。技術は高いが、自分も欲しくないと考えた。ここから自社でも3次元加工をスタート。うちで作ったものを、展示会向けに完成したのが「JACK E.T」。3D CADを駆使し、横型マシンでタのみで作成した。とにかく加工のプロたちも

形を展開し始めた。厚さ1ミリのアルミなどの鋼板に、高度な画像処理を施したモチーフを工作機械を使って削る。線の深さを変えることで立体的に画像が浮かび上がるほか、削ること地金が露出した部分に光が反射して、図柄がホログラムの様に化する。雨などにも強く、屋外で使用できるという。「刻鋺」はイタリアなど海外の展示会にも出展しており、来場者やデザイナーに新たな表現方法として注目を集めた。国内ではすでにホテルから注文が切れた。

新金属造形「刻鋺」展開

潜在的市場を掘り起こし

驚かせてやろう」とアサインを練り、30-40歳代をターゲットに、青春時代を思い起こすような作品に仕上げた。

同作品は工作機械メーカー、森精機製作所主催の第4回切削加工ドリムコンテストで金賞を受賞。アルミ素材を柔らかいジャケットに加工する意外性などが評価された。「予期せぬ成功」を得た同社は、その立加工技術などを応用し、「刻鋺」という新たな金属造



「刻鋺」を背景に川並社長(左)「祇園祭」情景からも切り取れる(右)

形を展開し始めた。厚さ1ミリのアルミなどの鋼板に、高度な画像処理を施したモチーフを工作機械を使って削る。線の深さを変えることで立体的に画像が浮かび上がるほか、削ること地金が露出した部分に光が反射して、図柄がホログラムの様に化する。雨などにも強く、屋外で使用できるという。「刻鋺」はイタリアなど海外の展示会にも出展しており、来場者やデザイナーに新たな表現方法として注目を集めた。国内ではすでにホテルから注文が切れた。

(早間 大吾)

「相談下さい。」